続・「子育て」雑考
——「子育て」と「育児」の20年——

小　林　美恵子

（はじめに）

昨年、本誌5号に「子育て雑考」として、新聞投稿欄（朝日新聞「声」「ひとときき」1984年1～8月分）に現れる「子育て」と「育児」という語について書いた。その中で傾向として見たのは次のようなことである。

(1)　「子育て」と「育児」の現れる度数においては「子育て」の方が多い。特に30～50代の女性ではそのことがはっきりと言える。

(2)　「育児」は「家事」と並べて用いられている例が多く、子を育てることそのものを指す。これに対し「子育て」は「育児」と同様に用いられることもあるが、むしろ「職業」「結婚」などと並べて、育てる女性のライフサイクルにおけるさまざまな要素のひとつとして扱われている例が多い。

(3)　「育児」は小学生以下の子を育てることに関して用いられることが多いが、「子育て」は子の年齢にかかわりなく用いられる。

(4)　男性が子を育てることについては「子育て」ではなく「育児」として表される場合が多い。なお男性の「子育て」といった場合には、具体的に世話をするというのではなく、母親をバックアップして見守るという意味で使われる傾向がある。

以上から次のような見解を持つに至った。

「子どもを育てること」を表す「子育て」という語が使われるようになったのは近年のことであるといわれるが、（江戸時代以来用いられた「子育て」とは一応区別して考えた。）これは「育児」と同様に用いられることもあるにしろ、「育児」の単純な言い換え語ではない。「育児」には子どもに対する具体的な世話というイメージがあり、そのために世話の必要な幼い子に対する場合や、今まで世話に手を出すことの少なかった男性が手を出し始めた、或いは出してほしいという場合などにはこの語が使われることが多い。「育児」以外の「家事」と並べて

使われることが多いのもそのためであろう。これに対して「子育て」はより抽象的であり、具体的な世話から教育・しつけ等をふくめた広い概念を持つ語である。それゆえ、特に女性が自分自身の一生のうちに子を育てるということを位置づけるときにこの語を用いることになる。このような視点は従来あまりなかったから、「子育て」は新しい概念を持つ語とも言える。しかしこの語の持つ概念の広さは、「父の子育てと母の子育て」と対比するような場合には、具体的に手を下す母と背後で見守る父というような旧来のイメージをも含むことになる。この場合の「母の子育て」は「育児」を単に言い換えたにすぎないわけである。

さて本稿は昨年の続編。（以下、昨年書いたものを『雑考』と略する。）津島佑子氏によれば「子育て」は7～8年前から使われるようになったと言われ（朝日ジャーナル・女の戦後㊶「OL、子育て、キャリアウーマン」1984・6・1)、筆者自身の調査では1970年頃に既にその例を見ていると『雑考』に書いたのであるが、その「使われはじめ」から現在までに使われ方の傾向や意味にどのような変化があったのか、あるいはないのか、「育児」とも対比しつつ調べてみることにした。

調査の対象としたのは、朝日新聞「ひととき」欄の1～7月分。① 1963～65年の615篇② 1973～75年の662篇、③ 1983～85年の624篇で、10年ごとに7ケ月3年分として区切ったのである。（本当は20年すべてをやりたかったが、何しろ筆者自身、仕事のほかに1才児の「育児」と小学生の上の娘の「子育て」に追われているので、これが精いっぱいというところ…）①～③各グループについて『雑考』と同様、最初にあげた(1)～(4)の視点から比較していくことにする。

なお『雑考』で調査した「声」欄については今回は行わず、したがって本調査の対象は女性のみ。女性についての使用傾向調査ということになる。

(1) 「育児」と「子育て」の使用度数

各グループについて、そこに現れる「育児」と「子育て」の数を比較した。（表1）

（表１）

		① グループ				② グループ				③ グループ			
	語＼年	63	64	65	計	73	74	75	計	83	84	85	計
<1>投稿の数（その語が現れる）	育　児	3	3	4	10	6	5	6	17	6	6	13	25
	子育て	0	1	0	1	3	3	3	9	8	7	3	28
	併　用	0	0	0	0	0	1	1	2	2	1	3	6
<2>用例数	育　児	3	4	4	11	9	11	16	36	13	11	24	48
	子育て	0	1	0	1	5	4	4	13	12	8	18	38

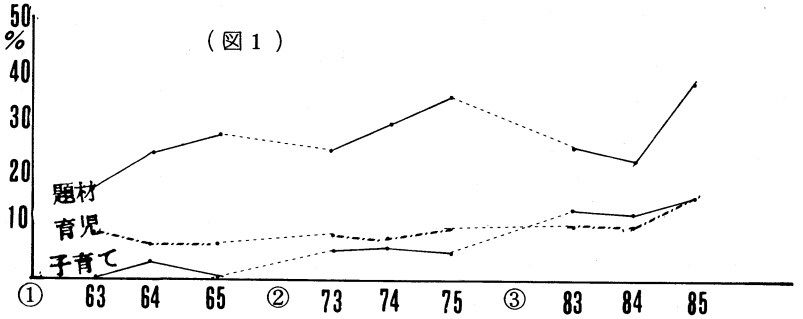
※　<１>で「併用」としたのは同一の文章中に「育児」「子育て」の両語が現れている投稿の数である。<２>は、「併用」の各例や一投稿中に何度も使われている「子育て」「育児」をすべて異なる１例として数えた用例の数である。

表からすぐに気がつくのは「子育て」にしろ「育児」にしろ、要するに「子を育てること」を指す語がこの２０年間に投稿欄には激増しているという事実である。各グループともほぼ６００篇強を対象としたが①グループ（６３～６５年）で「子育て」「育児」を使ってそのことに触れているものが１１篇（1.8％）にすぎないのに、②グループ（７３～７５年）では２８篇（4.2％）。そして③グループ（８３～８５年）では５９篇（9.5％）と５倍以上になっているのである。

もっともこのような語数（カード数）の増加は、ことばの変化ととらえる前に、文章の題材の変化なのかもしれないと考えておく必要がある。つまり①グループでは「子どもを育てる」ことを題材とした文章そのものが少ないのではないか、ということである。各グループに「子どもを主人公としているもの」および「子どもを育てることを主題としているもの」がどのくらいあるかを調べてみた。①グループでは両方あわせて１４８篇（２4.0％）②グループでは１８７篇（28.2

%)③グループでは２０４篇（３2.7％）で、やはりかなりの増加が見られる。ちなみに各グループの書かれた当時の世相を比べてみると、①グループは東京オリンピックを含むその前後の年、高度成長の頂点に達していた時期といえる。投稿の内容にしても「子どもを育てるに適した住環境がない」という悩みの他は「子どもを事故から守ろう」「育児に追われて忙しい」といった提言、感想が多い。②グループは「国際婦人年」を含んでその直前。公害や生活の見直しがさかんに言われ、主婦が家庭にこもることへの悩みや女性の生き方への提言が投稿でもさかんになされている。子どもに関していえばコインロッカー・ベイビーズが多出し、殺す母、殺させる父が大きく社会の問題となったころである。そして③グループはここ2～3年ということになるが、「国際婦人の１０年」最終年を迎え、国内でも、とにかく雇用均等法が成立し、国際法がかかわりと法的な女性の位置づけの変化もあり、１０年以前に比して社会での女性の活躍も目立つ。その反面、いじめの問題、受験戦争の激化、福祉行政の後退による乳幼児保育予算の削減など、子どもをとりまく状況はさらに厳しくなっている。「子どもを育てること」への不安、「育てながら女性が生きること」への関心は今までになくたかまっているといってよいだろう。投稿欄に「子どもを育てること」「子どもを主人公とするもの」が増えているのも全く頷けるところである。

ところでそのような題材の増加を考慮に入れても、やはり「育児」にしても「子育て」にしても使われる度数が増えてきていることはまちがいない。(図１)



※　「子どものこと」「育てること」を題材とした投稿のうち「子育て」「育児」をそれぞれ使っている投稿の数をグラフ化した。

ことに「子育て」については①グループでは1例見られるだけなのに増加の一途をたどり、③グループでは「育児」をも追い抜き上回って使われるようになったことがわかる。新語として、出発した語が確固たる地位を築き上げたということが図にもはっきりと示されている。

次に「子育て」「育児」それぞれを使用している人々の年齢層を整理してみた。

（表２）

年令＼グループ	子育て			育児		
	①	②	③	①	②	③
20代	1	1	4	4	5	9
30代		4	13	4	11	13
40代		5	12	1		5
50代			5		1	3
60代以上		1			1	1
不明				1,	1	
計	1	11	34	10	19	31

※　数字は投稿数による。但し両語併用の投稿は「育児」「子育て」それぞれに二重に数えた。

（表２）

③グループで「子育て」を使用しているのは圧倒的に３０～４０代で、全３４例中２５例をしめている。これに５０代の５例を加えた３世代では「育児」の使用（２１例）を上回っている。②グループでも４０代については11例中５例と同様。３０代では「育児」の使用量には及ばないが、それでも「子育て」に限っていえば、これが３０～４０代に多用される傾向ははっきりと見える。また①グループ（６３～６５年）ではただ1例の「子育て」が２０代によって用いられている。①グループの２０代は１０年後の②グループでは３０代、２０年後③グループでは４０代となるわけで、２０年前、２０代によって用いられていた「子育て」だが、使用者が３０代、４０代と年をとるにつれそれらの世代の語として定着していったと言えよう。ただそれらの世代のみが使っているのではないのは、②グループの２０代 ―「子育て」は1例のみ ―― が③グループで３０代に入ってからはこの語を最も使用する世代の一つとなっていることからも明らかである。即ち③グループ以後はその時点での３０代より上の人々に主に使われる語として定着していることが窺える。

なお２０代でなぜ「子育て」より「育児」が優勢なのかという点については

『雑考』で考察した。小論でも後に詳しく触れるが「育児」がどちらかというと幼い子を育てるということに使われる語であること、そしてその「育児」に直面しているのは２０代であるということから２０代の関心は「子育て」よりも「育児」に向いており、この語を多く用いることになると考えたのである。

(2) 用例の特徴

「育児」「子育て」の用例を並べてみると、そこにいくつかの使用の類型といったものであるのに気づく。それらをとりあげ、時代を追って考察してみたい。（なおこの節の用例数及び％はすべ投稿数（表１の＜１＞）でなく用例数（＜２＞）によった。）

i）「育児」を含む熟語

『雑考』でも簡単に触れたが「育児」という語にはその語を含む熟語が多い。次にその全例をグループ別にあげる。

①グループ４例（３６.４％）	②グループ４例（１１.１％）	③グループ６例（１２.５％）
―― 資　金	―― 休　暇	―― 休暇 ――ノイローゼ（２例）
―― 上	―― 休　職	―― 参加
―― 日　誌	―― 時　間	―― 戦争
―― 法	―― 方　法	―― 相談

なお、「―― 育児」という形の熟語はどのグループにも１例も現れなかった。

用例数については①グループが「育児」全例の１／３強と目立つ以外に特記すべきことはない。がむしろ注目したいのはその意味内容で、①グループがごく単純に「育児をする上での」方法とか資金とかを示しているのに対し、②グループでは４例中３例までが職業を持つ女性の育児のための制度を示す語であり、③グループでは「―― 戦争」「――ノイローゼ」「―― 相談」と育児の厳しさを思わせる熟語の使用が、これも６例中４例に達する。女たちが資金ぐりや方法を気にしながらも熱心に育児にとりくんでいた６０年ごろ、社会へ進出し、その中で女の生き方やそれにともなう権利を考えはじめた７０年代、育児のむずかしさが増し、子を育てることへの不安があきらかに

なってきた昨今と、それぞれの時代の世相をこれらの熟語はみごとに反映しているといってよい。

なお「子育て」については「子育て中」「子育て半ば」という例が見られるぐらいで、和語という性格にもよろうが、このような熟語例は全く見られない。

ii）「育児」と「家事」

これも『雑考』に報告したが、「育児」ということばは「家事」と並べて用いられることが多い。（表３）

（表３）

	語＼グループ（年）	①（63～65）	②（73～75）	③（83～85）
A	家事～、育児～	2	1	
B	家事□育児		3	2
C	育児□家事	1		5
D	家事、育児		3	9
E	育児、家事			2
	計（%）	3（27.2）	7（19.4）	18（37,5）

表３のAは

例1.　周囲の理解の上に、他の家事は少々おろそかになっても育児に専心しているのにわが家でも小さい事故が二つあった。

（63、6／27　32才　主婦）

のように意識の上では家事と育児が並立しているが、形式上は単純な並列となっていないもの。B、Cで□で表したのは「と」「や」などの助詞や「－にしても、－にしても」というような形で並列されているもの。D、Eは単に並べられたもので、これらのうち「家事、育児」では特に「家事育児」と

２つをつなげて読点等打たず熟語のように用いているものもあるがこれは特に区別しなかった。

表を見ると、①グループでも「育児」と「家事」の並列意識はあるのだが③グループに至ってはふたつの語は既に切っても切り離せないような対の語としての位置に定着したかのように用例が多い。なかには（85、7／29　29才　主婦）の文章のように、およそ700字の文中に4度、例外なく「家事育児」と一語のように用いているものもあった。さらにこの投稿も含め、4例が「家事、育児、老人介護」と三語を並べていた。

例2.　家事育児、老人介護は主婦の役割という以前に、もっと男性も家事育児を分担すべきであり……（85、7／29　29才主婦）

例2の筆者も述べているように家事や育児に加えて老齢化社会での老人介護が女性の肩にかかり「女は三度老後を迎える」というような形で一つの社会問題となっている状況の反映かとも思える。

なお、もう一つ興味深いのは③グループで並列の順序が「育児、家事」となっているものが1／3強もあることである。これは①②グループには全くない新しい形といってよい。二音、三音の組合せであれば、短い音が先に来る方が語としての安定感はよいのだが、そのような「耳の習慣」を越えて「育児」を先に言う意識は、やはり「子どもを育てること」「育てながら女性が生きること」への不安や関心のたかまりを反映しているのかもしれない。

ところで以上にあげた「家事」はいうまでもなく育児以外の家庭内の仕事を指しているのだが、『雑考』では「炊事、洗濯、育児等家事」と育児を家事のうちの一つとしてとらえた例もあることを報告した。「声」欄に2例ほど見出されたのだが、このような使い方は「ひととき」欄には①〜③グループを通じて1例も現れなかった。やはり女にとって育児の重さは家事の比ではないということであろう。

「家事」の他に「育児」はどのようなものと並べられ、あるいは対置されて用いられているだろうか。次にその全例をあげる。

F　妊娠・出産と並べる（3例）

例3.　彼（息子）の応召、彼女（息子の妻）の出産・育児と続き私が一切

の労働を買って出たのだった。（６３、６／１９　８５才）

例４　外国なみに出産育児の福祉手当が考慮されたなら（中略）とびあがって喜こぶおかあさんがどんなに多いことでしょう。（６４、７/13　主婦）

例５　女教師の妊娠・出産・育児という問題のやりきれなさを感じています。（６５、５／２９　２８才　教師）

G　結婚と並べる（２例、→例５）

例６　あなたほどのりっぱな過去の持ち主にはぜひともこの「結婚」「育児」をのりこえてあなたにふさわしい未来を築いていってほしい。（７３、３／２３　３５才　自由業）

H　職業・学業と並べる（２例）

例７　女性は結婚か職業かの選択をせまられ、さらに育児か職業かのより深刻な第２の選択をせまられるのです。（５４、３／２７　主婦）

例８　家事　育児　職業　学業を兼任するいまの私は、家庭の外に自己主張の場を求めては焦り……（８３、６／２４　２７才　主婦）

I　家庭生活、主婦業と並べる。

例９　今まで振り向かなかった別の世界での家庭生活、育児、主婦業をしている自分に変った。（８４、５／２５　３７才　主婦）

J　しつけ、生活態度と並べる（２例）

例10　この騒働で私の育児や生活態度が問われ深く考えさせられた。《オモチャの始末をしないわが子》（７３、１／２９　２６才　主婦）

例11　考えてみますと私の育児やしつけにも大きな原因を見いだします。《いじめられ、泣き虫のわが子》（８５、３／１４　４１才　主婦）

一方「子育て」はどのような語とともに用いられているだろうか。これも全例をあげる。例は「生活苦」と並べた１例の他はすべて③グループのものである。

K　職業と並べる（４例）

例12　仕事と子育てと、あなたはみごとにバランスを取っていたのですね《女医だった母に》（８３、３／２７　２５才　学生）

例13　女性の自立や職業と子育てなどの問題が叫ばれて久しい。
（８４、４／２１　２５才　主婦）

例14　女性たちが家庭での、職場での、子育ての上での折々の思いを正直につづるのと同じように男性も……（８５、１／２８　３５才　主婦）

例15　就職、結婚、子育て、「さて、これから」と思い、少しでも条件の良い職場を……と思うと……（８４、６／２７　３４才　パート）

Ｌ　「女性の自立」と並べる → 例１３

Ｍ　結婚と並べる → 例１５

Ｎ　家庭（生活）と並べる（２例 →例１４）

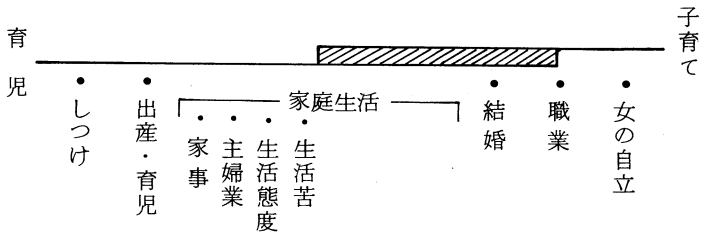
例16　核家族化がすすみ、お金さえあれば事足りる衣食住とは本質を異にする「家庭生活」、子育てのこと、最近よく耳にする育児ノイローゼ、子殺し、家庭内暴力……（８４、６／３０　３７才　主婦）

Ｏ　生活苦と並べる

例17　子育てと生活苦に追われて暮した三十代にも別れをつげ、ようやく訪れた第二の青春……（７５、１／２０　４２才　主婦）

Ｆ～Ｏで特徴的なのは、Ｆ（妊娠・出産）が「子育て」とは並立していないこと、また「職業」が「育児」と対置されている例もあるが（Ｈ）、どちらかといえばＫのように「子育て」と並べられることが多いというあたりか。「結婚」や「家庭生活」はその中間で２つの語どちらとも、ほぼ互角に結びついているといえる。「家事」も含めこれらを図２のように示して見た。

（図２）



図中斜線部分の語は「子育て」とも「育児」とも並立、対置して用いられているものである。この図から気がつくのは右端「子育て」から左端「育児」にむかって、並立している語を見るとあたかも女性のライフサイクルの一部が展開されているかのように思われることである。即ち職業を持ち、結婚をし家庭生活を築く、そして子どもを持つということになるわけだ。そのうちの「家庭生活」、その中にさまざまな要素を含む包括的、抽象的な語である「家庭生活」までが「子育て」とともにつかわれる範囲であるというのが興味深い。『雑考』で書いたように、この語が具体的に子の世話をしたりしつけをしたりということを指すより、女自身の生活、人生の過程の中で位置づけられた子を育てる部分を指すということと矛盾しない。結婚も職業も家庭生活を築くということも、女自身が意識することにより同様の位置づけができ、そこにそれを営む人間の思想や個性も現れ得るのである。一方、ある程度決まった手順、要素を必要とする具体的な家事、生理に直結して一定の経過をたどる妊娠・出産が「育児」とともにのみ使われていることと対照的である。

ただ、ここで一つ述べておきたいのは、「育児」という語が『雑考』で考えたのより、ずっと幅広くいろいろな語とともに使われ、「子育て」とほとんど同様に女の人生の部分をさす機能をもそなえつつ、「子どもを育てること」のより具体的に手を下していく面をも言いあらわしていることである。もともと広く使われていた「育児」という語の、特に女の人生の一部としての「子を育てること」を表す機能部分を「子育て」という語が肩替りしつつあると考えればよいのであろうか。

iii)「子育て」だけの人生なんて

「育児」に「家事」と並べられたものが目立つように「子育て」で目立つのは、これを人生のある期間をしめるがいつかは終るものとして「終る」という視点からとらえた例である。

例18　子育てが終ったら、また山に行こう（８５、６／３０　３１才　主婦）

例19　出産のために退社したのですが、子育てが終ったらまた仕事を持ちたいと念じていました（８４、７／３０　３５才　団体職員）

例20　あと何年かして子育てが一段落し、定年退職したら多少の余裕もできるだろうと、それを楽しみに過してきたような気がします。
（８５、４／２２　４４才　主婦）

例21　将来社会につながる窓が開けていると思えばそろそろ子育ての終った家庭婦人にも自分を高めようという意欲がわき新陳代謝が盛んになって若返るにちがいない（７４、６／５　主婦）

例１８～２１のように「終る」「一段落する」という言い方で「子育て」について述べたものが②グループに２例、③グループに５例の計７例見られる。これらのほとんどは「子育てが終ったら」――自分のために何かをする。職業を持つ、趣味を楽しむ――といった論調であり、「子育て」は重要な大きな部分ではあるにしろ自分の人生の一部分にすぎないという意図は明確であろう。このような言い方は「育児」では次の１例のみである。

例22　育児が一段落した後の中年の主婦になってから自分でやりたくてやる勉強はまさに喜びでした。（８３、４／１９　３９才　主婦）

また同じく「育児」ではあまり見られず、「子育て」には多く現れている言い方として「子育ての時間」「子育て中」「子育て真っ最中」のように「子育て」をある期間と区切って、その時期全体や、その期間の中のある一時点について述べたものがある。このような例が②グループに２例、③グループには７例も現れる。

例23　子育てに忙しかったころ　子どもが大きくなったらあれもしよう、これもしようと夢を見ることで我慢してきたことがいっぱいあった。
（７５、２／６　４７才　主婦）

例24　楢本さんの愚痴（子育てに忙しく何もできない）はかつての私のそれであり、また子育て真っ最中のヤングミセスのつぶやきでもあるでしょう。（８５、２／６　３０才　主婦）

例25　ともかくも立派に子育ての時期を過されたお母さんに再び子育ての苦労をおかけするとは。《自分の母に子を頼んで外へ出る主婦への批判》（７３、５／13,　６３才　主婦）

例26　精いっぱい夢中で過した子育ての日々もつい先日晴れやかな笑顔を

残して巣立っていった上の娘ももう戻ってこないのだなあと思うと…

（８３、７／１　５２才　主婦）

例27　育児中の母たちが助け合うことは本当に今必要なことでしょう。

（８３、２／18　２８才　主婦）

例28　おんぶにだっこに手をひいて髪ふりみだしての育児期間

（８５、６／３　４４才　主婦）

例２３、２４は前述の「終る」と同様自分の人生の側から見たもの。例２５、２６は単に「子どもを育てている時」の意味で、どちらかといえば「育てる」ことの方に比重をかけて使っている例だが、いずれにしても子を育てることを女性の人生のすべてをかけてやる仕事とは考えていない。もしくは考えたくても考えられない状況がここには現れているようだ。このような使い方も「育児」では例２７、２８の２例にすぎないこと、またこれが、女性が自身の人生への懐疑や展望をさほど抱いていなかった①グループ時代には見られない言い方であることからも、「子育て」という新語が定着していく上で背負った「育児」ではまかないきれない一つの機能であったのだろうと考える。

ところで、このような「子育て」の使い方が全く見られない①グループ（１９６５年ごろ）に、今ならば明らかに「子育て」を使うだろうと思われるような場面にしばしば「養育」という語が現れるのに気づく。「子どもを養育中の現在」「八人の子の養育にうちこんだ母」というような言い方で①グループに４例、②グループに１例見出した。

例29　子どもの養育を終り、母親を卒業した年代の女性

（７５、２／６　４７才　主婦）

この言い方は「子育て」が定着すると姿を消していく。今、国語辞典で「養育」をひくと、

離婚して、どちらか一方の親が育てる場合をのぞいて、自分の子については使わないのがふつう。　（例解新国語辞典）

（他人の）子供を自分の手もとで、めんどうを見ながら育てること。

（新明解国語辞典）

などとあって、「養育」はどちらかといえば自分の子でなく他人の子を育て

ることを指す語であると説明されている。しかし例２９の「養育」は明らかに自分の子を育てることについて言っている。このような使い方が決して特殊ではないことから、むしろもともと「養育」には他人の子を育てるという限定はなかったこと、「子育て」という語の定着により「養育」から自分の子を育てるという意味あいが薄れたといえるのかもしれない。――この点については今後もう少し調べて見る必要はあるが、「子育て」が「養育」という語の意味に変質を及ぼした可能性もある、とは少くとも言えるだろう。

なお、「子育て」に人生のすべてをかけないという考え方は次のような例にもっともはっきりと示されている。

例30　子育てだけで人生を終りたくないという思いを多くの婦人は持っているのではあるまいか（７８、４／27　３３才　学生・《主婦》）

例31　子育てだけで一生を終ったのでは生きたという実感をもつことはできないのではないかと日々疑い続ける私、（78、4／16　34才 主婦）

このような言い方、「子育て」に３例（いずれも②グループ）に見られるが「育児」にはない。

例32　「育児が最高の生きがい」なんてとても思えない。（中略）今は子供にとって母親が最も必要な時だと思うから育児に専念しているのだ。（８５、５／28　２９才　主婦）

と同じような内容をいっても、「育児」の場合、〝一生から見て〟というのはそぐわないようだ。あくまでも、その時点で生きがいか、否か、専念するか否かという点から語られているのである。なおこの「専念する」という言い方も「育児」に独特で、「子育てに専念する」という言い方は現れない。――「子育てだけの一生」はあり得ても「育児だけの一生」はないのである。

(3)　子の年齢と「育児」「子育て」

「子育てだけの一生」があって「育児だけの一生」がないということになると、想起されるのは『雑考』で見た「育児」は低年齢の子に使われるが、「子育て」は育てられる子の年齢を問わないという結果である。①グループ～③グループを通して同じことが言えるのだろうか。『雑考』と同様、育てられてい

る子の年齢を明記しているものについてその数を年代別に整理してみた。（表４）

（表４）

語	子育て			育児		
グループ／その年代	①	②	③	①	②	③
乳児　０～２才	1		1	6	2	4
幼児　３～５才			1	1	2	1
小学生		1	2		1	2
中学生			5			1
高校生		1	3			1
成人（大学生～）		1	3			

「育児」、③グループに中、高校生が１例ずつあるが、これは例２８で、同一の投稿者によるものである。書かれている子どもたちは現在大きくなっているが、用例として「育児」が出てくるのは「おんぶに抱っこ」をした幼い頃の思い出について書かれた部分である。（なお、このように１人の投稿の中に２人以上の異年齢の子がでてくる場合はそれぞれの年齢の項にダブって分類してある。）

このように①～③グループを通しても『雑考』の結果と同じく、「育児」はせいぜい小学生まで、子育ては年齢を問わず、むしろ中学生以上について書かれたものに使われる傾向が強いということは、はっきりといえる。

(4) 男が子どもを育てること

最後に男性が子を育てることを、どういう語で表わすかという点であるが、これも『雑考』の結果と全く同じで、③グループに１例「子育て」が見られた他は②グループに３例、③グループに１例、すべて「育児」という語で表わされている。

例33　父親もしっかり自信のある態度で子育てすべきです。

（８４、３／３　３８才　主婦）

例34　育児に対しては（父親も）母親と同じに責任を持ち出来るだけ協力するという態度が欲しいものです。（７４、４／１２　２８才　主婦）

父親に望まれている子どもに対する役割は、抽象的な「権威」ではなく、自ら具体的に手を下し世話をすることである、とは『雑考』にも書いたのだが、女性が社会へ目をむけ、固定化した性役割へ疑問を持ちはじめた時期の②グルー

プに「父親の育児」への論及が比較的多いということも、これと矛盾しない。

この他に1例次のようなものに気がついた。

例35　私が夫に協力を求めたいのは家事より保育です。

（８５、１／１２　３１才　教員）

共働きの女性教師が、夫にも保育園の送り迎えや、子が病気のとき休暇をとって看病することを分担してほしいと書いている投稿である。ここでは「子育て」でなく、「保育」という語を使っているのが目新しい。具体的に上げられた仕事、もちろん直接的には子どものためにやるのだが、それとともに働く妻への援助としての側面が強い仕事であるともいえる。働く女性にとって保育所が果している役割の補いとしての働きを夫に期待しているのである。たった1例から判断する危険を承知であえていえば、女は「育児」「保育」を分担してほしいと、男に望むとき、単に「子どもにかかわる」というような抽象的なことを望んでいるのではなく、「育児」ではオムツをかえたり食事をさせたり、その中でしつけをしたりという具体的な世話を望み、「保育」では前述のように、働く妻を補い助けてほしいと望むというふうに、かなりキメの細かいことばの使い分けをしながら、具体的な要求を夫たちにつきつけているのだといえる。

(5)　「子育て」の抽象性

『雑考』では「育児」が実際に手を下して世話をし、しつけをするという具体的なイメージを持つのに対し、「子育て」はより抽象的な語である、と述べた。次にあげる「子育ては　～　だ」という定義の形をした例は、「子育て」の抽象性をまさに示している。「子育て」については5例（②グループ、③グループ）ほど見られたが「育児」には現れない言い方である。

例36　子どもの生命の躍働をじっと観察することから始まる行為が「子育て」であろう。（７４、５／１４　２６才　主婦）

例37　子育ては、親自身も育っていくまさしく「共育」なのだなとつくづく思っています。（８５、６／３　４４才　主婦）

(6) 「育児」と「子育て」の共通部分

以上、「育児」と「子育て」の相違を中心に述べてきたが、この二つの語にはもちろん共通して使われる言い方もある。

例38 （長男誕生）そして五ケ月、育児がこんなに大変なものだったなんて （８５、６／３０ ３１才 主婦）

例39 核家族で共働きの子育ては本当に大変なものだった。
（８３、７／７ ４１才 大学講師）

例３９の「子育て」は抽象的な意味で用いられているのでなく、そのような家族状況の中で具体的に子の世話をし、しつけや教育をしてきたということを言っているわけだから、子の年齢的な差や、それによる仕事の内容の差異はあっても、具体性という点で、この「子育て」は例３８の「育児」に近い用いられ方をされているといってよい。

例40 家事にも慣れ、育児にも余裕がでてくると、家の中だけの自由時間ではもの足りなくなって……（７３、３／１０ ３１才 主婦）

例41 子育てにも慣れて余裕がでてきた証拠でしょう《家の中にいることにあきたりなくなった》 （８５、２／６ ２６才 主婦）

などもほとんど同意の用いられ方をしている。このような言い方は「家事育児の価値」「子育ての価値」「育児にいそがしい」「子育てにいそがしい」「子育て中」「育児中」「二人（夫婦）でかかわろう――」等グループにかかわらず見られる。例３８・３９の類似は「子育て」が通常「育児」に特徴的である具体性に近づいた結果おこったことであるが、両語の類似は常にこのような形で起こるというわけでなく、「子育て」の抽象的な用法に「育児」が近づいている例も見られる。そのような形のどちらが優勢ということもいえないように思う。

（まとめ）

最後に２０年間の「育児」「子育て」の変遷について、以上の結果をもとに概観しておく。

２０年以前と現在の子どもを育てることに対する人々の感じ方はずいぶん違っ

てきているように思う。２０年前（１９６５年ごろ）には母親はまだそのことを天職と心得て家庭の内で子を育てる仕事に向き合っていた。子を育てることに際しての悩みはもちろんあったが、それは「子がよく育たない」とか「子を育てるためのまわりの条件が悪い」とかいったもので、育てる母親自身のあり方についての悩みはほとんど見られない。「子を育てること」を一般的に指す語は「育児」であり、この語は具体的な子の世話をするという概念を中心におきつつも、かなり広い意味をもち抽象的な意味での「子を育てること」をも含んで使われた。また、まれに「育児が終って、子は皆独立した」という意味を育てた母親を主体として言うような場合には「子の養育」というような言い方もなされていた。

１０年前（１９７５年ごろ）には「子育て」という語がかなり頻繁に使われるようになっている。この時点でのこの語の使われ方は現在とほとんどかわるところはない。即ち主に小学生～成人の子について、その年代の子を持つ３０～４０代の人々中心に使われていること、したがって身辺の世話とかしつけとかいうよりは、もう少し抽象的な――精神的な部分で子にかかわることを示す場合が多いことがいえる。また人生八十年などとも言われる長生き時代にさしかかって、女性の人生が子を育てることのみで終始しなくなったことや、それにともなって女性が自分自身の生き方を考えるようになったこととともあいまって、「子育て」と言えば終りのある〝ある期間〟というイメージで使われていることも特徴の一つである。この時期には、そのような世相、人々の考え方の変化にともない、広い意味をもっていた「育児」のそのような意味を表す部分を中心に「子育て」という語が進出し、肩替りをしていったのだと考えられる。ただし、この進出の進出した部分としない部分の境界については、男性が子を育てることを示す語のようにくっきりと使いわけられている部分もあれば、両方がいり乱れている部分もあるというふうで、本調査でははっきり特定するということはできなかった。

なお同時に「子育て」は「養育」という語などにも同じような進出をし、「養育」は「育児」ほどに広い意味用法を持っていなかった故か、今や２０年前とはその意味にさえ変質をきたすような影響も及ぼしたわけである。

そして２０年後の現在、「子育て」はますます勢いさかんで、「育児」の使用を追いこしてしまった。もっとも「育児」がそれによって駆逐されたということ

では全くなく、「子育て」の進入を受けなかった部分の意味を中心に「育児」という語も１０年前、２０年前に比して、さらにさかんに用いられている。子を育てるということは女性の人生の中では限られた一期間を占めることにすぎなくなったが、現代の社会状況や、また女が子を育てること以外の自分の人生を持とうとすることも、その価値判断はともかくとして、従来の「育児」―― 具体的に世話をすること ―― の形態の変化を喚起するものであることはまちがいない。新しい形態を模索し、なじむ必要があるために子を育てることには過去にはなかったむずかしさがつきまとう。子どもへの関心はますます高くなる。そんな世相を反映し、「育児」という語はますます健在なのであろうと思われる。